

1 2. 近年の大分県有種雄牛造成の成果と利用状況について

農林水産研究指導センター畜産研究部

○加藤洋平・白根英治

【はじめに】

H27年度以降、当研究部では従来の枝肉成績に基づく推定育種価よりも早期に能力判定が可能なゲノム育種価を活用し、候補種雄牛の選抜に取り組んできた。その結果、R3年以降現場後代検定成績の県記録の更新に加え、凍結精液譲渡本数及び子牛市場の県有種雄牛上場割合が増加する等の好影響が見られたので、その概要を報告する。

【県有種雄牛凍結精液の譲渡状況について】

凍結精液の年間譲渡本数は、H30～R2年度は減少傾向にあり年間1万本を下回っていた。R3年度は1万2千本と増加し、R4年度1万4千本弱、R5年度1万2千本で推移している。H30年、県で初めてゲノム育種価を基に百合白清2産子7頭が候補種雄牛として選抜された。特に葵白清は脂肪交雑（BMS）のゲノム育種価が県歴代1位で、同年9月に関係者・生産者200名を集めた選抜会を開催した効果もあり、12月の供用開始後に注文が急増した。R3年度の松吹雪・桜花久以降、県有種雄牛はBMSの県歴代記録の更新が続き、その都度マスコミ等により記録更新やゲノム育種価を用いた和牛改良について紹介され、譲渡が増加した。R4年度上期は加代白清のBMS去勢平均が9.9、下期～R5年度上期は安白清・葵白清の去勢平均BMSが県有種雄牛初の2桁（10.4、10.1）となり、九州管内枝肉共励会では加代白清で県勢10年ぶりの個人賞（銅賞1席）を受賞した。R5年度下期は、県畜産共進会で加代白清が肉牛の部グランドチャンピオン、2～5席が葵白清となり、ゲノム種雄牛の評価が定着しつつある。特に加代白清が人気でR6年度は8月までの譲渡総数の53.9%を占める。

【県子牛市場における県有種雄牛割合について】

県内子牛市場の県有種雄牛割合は、R4年度まで10～20%で推移していたが、R4年12月以降増加傾向にある。R5年1月は25%を超え、同年6月以降は20%以上が持続し、R5年12月～R6年1月は30%を超える高水準となった。特に加代白清の割合が高く、R5年12月は12.8%で過去最多となり、R6年1～8月は平均10.0%となっている

【考察】

ゲノム育種価を用いた候補種雄牛の選抜による種雄牛造成は有効な手法であることが示された。これまでの譲渡本数の推移から、増加した要因について①ゲノム育種価での選抜とその手法の情報発信、②検定成績（特にBMS）の県記録更新、③マスコミ等での報道等、④共進会等での優秀な成績が挙げられる。市場の県有種雄牛割合がR4年12月以降増加したことについては、R3年度以降検定で好成績となる種雄牛が続き、譲渡本数が増加したことがきっかけと考えられる。特にR5年12月～R6年1月の30%超という近年稀な上場割合はR4年度上期の加代白清の譲渡本数増加によるものと考えられる。検定成績（特にBMS）の記録更新により譲渡本数が増加し、子牛市場の上場頭数も増加するという好循環ができています。